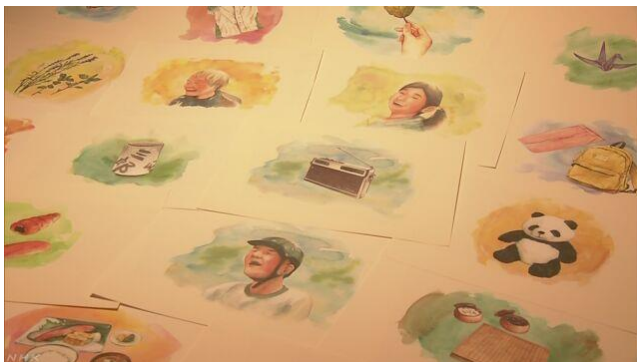


大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3490 号 2017.1.29 発行

障害者殺傷事件 「19のいのち」をたどって



てきたのは、かけがえのない日常を生きていた19人の姿でした。亡くなった方が好きだったものをイラストで、家族の了承が得られた方は似顔絵を添えて、障害者殺傷事件取材班の松井裕子記者がご紹介します。



囲碁が大好き 49歳の男性

亡くなった49歳の男性と67歳の男性をよく知るといふ元職員、細野秀夫さん(71)。2人を10年にわたり担当してきました。笑顔が印象的で、活発だったという49歳の男性、時折、気持ちが不安定になることもあったといいますが、囲碁が大好きで毎週日曜に放送される囲碁のテレビ番組が始まると、静かに集中していたとい

います。細野さんが「残念ながら囲碁はわからないんだよ」といふと、「今度僕が教えてあげるよ」と話してくれたこともあったということです。

北島三郎さんの大ファン 67歳の男性

67歳の男性はシーツ交換や畑仕事などを



よく手伝ってくれ、施設の中では「準職員」と言われ、頼りにされていました。夜勤の朝には

細野さんのもとに「もう5時だよ、起きるんだよ」と起こしに来てくれたといい、細野さ

んは「いい相棒だった」と振り返っていました。

演歌歌手の北島三郎さんの大ファンで、一緒にコンサートに行ったときには、湯飲みを2つ買って1つを「記念にあげるよ」とプレゼントしてくれたと言います。細野さんは「精一杯生きてきた彼らを絶対忘れてはいけないし、生きていた証しと、こういう事件があったことは残していかななくてははいけない」と話しました。

お兄ちゃん大好き 70歳の女性



犠牲になった人の中には、およそ50年、施設で暮らしてきた70歳の女性もいました。この女性が担当していた元職員の溝口知子さんは、女性がお兄さんのことが大好きだったことを振り返り、「今月の何日は保護者会だから、お兄ちゃん来るよと言うと、ニコニコと笑っていました。身体的な障害がなかったのでよく兄妹で手をつないでお散歩へ行きました。一緒に歌も歌っていま

した。いちばん幸せそうな顔でした」と懐かしんでいました。

溝口さんの自宅はやまゆり園の建物が見えるほど園の近くにあり、24年間働いてきた中、亡くなった方たちを家族のように思ってきただけに今回の事件について語るができなかったと言います。しかし、今回初めて取材に答えた溝口さんはその理由について「あの人たちがどんな努力をして障害を1つでも2つでも乗り越えてきたかということ、やまゆり園で生活し楽しく過ごしていたことを彼ら、彼女らも

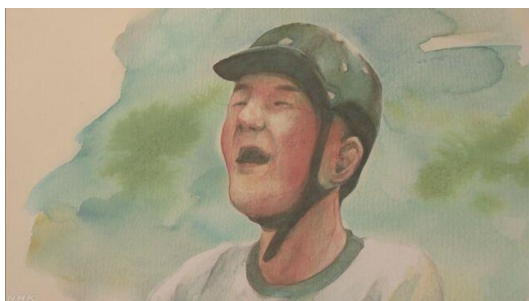


伝えたいだろうし私たちも伝えてあげなくてはいけないと思った」と話していました。

感情豊かな 55歳の男性

亡くなった55歳の男性に特別な思いを寄せる人もいました。元職員の中川尚也さん（37）は、介護の仕事に就いて初めて担当したのが、亡くなった男性でした。介護の仕事に慣れない中川さんにとって、男性は仕事のやりがいを見せてくれたかけがえのない存在だったと言います。「本当に勉強する部分が多かった。厳しいながらも優しくかったですし、やればやった分だけ笑顔で返してくれる方で、最初の担当が彼で本当によかったなと今でもつくづく思います」と話していました。

少し足が不自由だった男性が歩きやすいよ



う特注した靴をプレゼントしたときには靴を指さして笑ってくれ、ぼろぼろになっても「これを履くんだ」と気に入ってくれたことがうれしかったと言います。



う特注した靴をプレゼントしたときには靴を指さして笑ってくれ、ぼろぼろになっても「これを履くんだ」と気に入ってくれたことがうれしかったと言います。



中川さんは、「よく笑う喜怒哀楽が本当に豊かな方でした。容疑者が言ったコミュニケーションがとれない人を刺していったという言葉に、『うそつくなよ、あの人は絶対とれる』って思っていました。一緒に居たものとしてどんなことがあっても忘れないです」と話していました。

35歳の女性亡くした家族は

事件で亡くなった35歳の女性の家族のひとりも私たちの聞き取り取材に答えてくれました。女性について「いくつになっても甘えん坊でした。私の足をたたいてだっこをせがんでくるので、膝に乗せて抱きしめると、喜んでいました」と語りました。女性は生活に家族の助けが必要で4年前、母親の病気が悪化し、やまゆり園に入所したということで「おみやげにぬいぐるみを持って行って渡すと抱きかかえたり振り回したりして、ニコニコした表情を浮かべていました」と振り返りました。



一方で、寂しそうな様子を見せることもあったと言い、「ドライブが好きなのでよく相模湖に連れて行き、車いすに乗せて水辺を散歩しました。園に帰り『じゃあね』と言うと『え、帰っちゃうの』という表情をしていました。園の職員には、本当によくしてもらったと思います。家が好きだったんだと思います」と語りました。

た。

家族は毎朝、女性が好きだったコーヒーを供え手を合わせているといいます。今の心境について、「いま思うことは、ごめんねという言葉しかありません。施設に預けた私がいちばん悪いんです。容疑者の『障害者は不幸をつくる』という言葉には、違うんだという気持ちは当然ありますが、社会の中には、障害者に差別的な考えを持つ人も、それ以上にや



さしい人も両方います。社会とはそういうものだ」と受け止めています」と静かに語っていました。

見えてきた19人の“素顔”

草や葉っぱを手に取ってくるくると回すのが好きだった55歳の女性は、いつもニコニコしている穏やかな人でした。

洗濯物を畳むのが得意だった65歳の女性は明るく世話好きで、施設の職員をよく手伝っ

ていました。

いつもラジオを肌身離さず持っていた66歳の男性は、笑顔がすてきな人気者でした。

43歳の男性は野球が好きで、たくさんのユニフォームを持っていました。

毎日の食事をおいしそうに食べていた40歳の女性は、散歩やドライブを楽しみながら過ごしていたということです。

半年の取材によって19人の一人一人に豊かな個性があり大切な日常があることが、少しずつ見えてきました。

事件見つめる動きも

事件から半年がたちその衝撃が薄れている



中、元職員の中には今回の事件を広く考えて欲しいと取り組む人もいます。「津久井やまゆり園」の元職員、西角純志さんは現在、講師をつとめている大学の授業で、今回の事件について学生たちに伝えています。西角さんはかつて支援に携わった7人が今回の事件で亡くなったことそして、7人との思い出や人となりを伝えました。また、犠牲者が匿名のままになっていることや事件の背景にある障害者への差別や偏見についてどのように思うか学生たちに問いかけました。

学生からは、「遺族の気持ちを思えば匿名もしかたがない」という意見があった一方で、「事件を風化させないためにご遺族の話を知りたい」とか「障害者だけが匿名なのは逆に差別ではないか」といった意見がでました。さらに、障害者を差別するような意識は社会にも潜んでいるのではないかという議論になり、学生からは「インターネット上でも容疑者の考え方に同意するような人もいて、社会の風潮として感じる」という声があった一方で、「同じ社会で生きていく中で障害は1つの個性と捉えて、一緒に歩んでいかなければならない」という意見もありました。



西角さんは、『障害者』とひとくくりにされているが一人一人が違う、個性や性格も全部違う。生きた証を語り継ぐことで事件の風化を食い止め、社会の問題として今回の事件をとらえ



ないといけない」と語りかけました
「19のいのち」をたどって

事件の後、容疑者の男は「障害者は不幸しか作らない」とか、「意思疎通が出来ない人を狙った」と供述しました。しかし、亡くなった方たちの取材を重ねれば重ねるほど、決してそんなことはないということが見えてきました。



19人は豊かな個性と感情をもち、周りの人と深く関わり合いながら、かけがえのない日常を生きていました。

そのことを少しでも伝えたいと、私たちは今回、「19のいのち」というウェブサイトを開設しました。19人の人生をお伝えするにはまだまだ不十分ですが、あの事件が奪ったものの重さとその痛みを想像し、二度とこうした悲劇が起こらない社会に

していけるよう、これからも少しずつでも伝え続けていきたいと思っています。



やまゆり園建て替え撤回…今夏までに方針 障害者団体から批判的意見 産経新聞 2017年1月28日
津久井やまゆり園前に設置された献花台＝8日午後、相模原市緑区（古厩正樹撮影）

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が殺害された事件で神奈川県は27日、今年3月末までに策定するとしていた施設の全面建て替えに向けた基本構想を事実上撤回し、さらなる検討を重ね、今年夏ごろ

までに方針を決めると発表した。障害者団体から建て替えに批判的な意見が出たことを受けたもの。入居者の家族会や障害者団体からの意見を踏まえるという。

食・農・さが 障害者と農業 連携加速 雇用、工賃増へ参入広がる

佐賀新聞 2017年01月28日



サツマイモの出荷作業をする利用者ら。機械、手作業の2段階で丁寧に洗う＝藤津郡太良町の佐賀西部コロニー収穫したトマトを選果しながら一つずつ磨き上げるス



タッフ。個性や特性に応じて作業を割り振り、高品質を支えている＝多久市の障害者支援センターまや「地域の人的資源を活用し、障害者の居場所をつくって」と訴える農林水産政策研究所・主任研究官の小柴有理江さん＝熊本市国際交流会館

障害者らが農業の担い手となり、生産振興や地域の活性化、福祉環境の充実を目指す「農福連携」の取り組みが、佐賀県内でも広がっている。すでに農業に参入している福祉施設では、高品質で付加価値の高い作物で認知され、障害者の就労支援や工賃アップにつなげているところもある。

農福連携は、昨年6月に閣議決定した「日本再興戦略2016」にも明記され、国の重点施策に位置付けられた。社会福祉法人などが障害者の雇用・就労を目的に、農園や加工・販売施設を整備する際の費用を補助する農水省事業や、都道府県が栽培技術の指導や加工・販売に向けたアドバイスを専門家を派遣するときの経費を全額負担する厚労省事業など、支援メニューも拡充している。

今月16日に熊本市で開かれた「農と福祉の連携推進セミナーin九州」（農水省主催）には、自治体や福祉関係者ら約130人が参加。農林水産政策研究所・主任研究官の小柴有理江さんが、障害者雇用を増やすとともに収益を上げている法人・企業などを紹介した。

パネル討論では、障害者雇用に取り組んだ農家が、障害の特性や個性と向き合いながらマンツーマンで技術指導した経験を語り、「今や欠かせない戦力になっている」と強調した。

佐賀県内の先進事例と、セミナーでの講演要旨を紹介する。

■佐賀西部コロニー（太良町） 高齢農家から受託

ミネラルを多く含む有明海の濃縮海水を活用する独自の農法で、「海水みかん」や「海水さつまいも」をブランド展開している福祉作業所佐賀西部コロニー（藤津郡太良町）。高級鶏卵やシイタケの生産、加工・販売まで幅広く手がけ、120人が就労している。

もともとは木工が中心だったが、2006年施行の障害者自立支援法をきっかけに新たな授産事業として農業に本格参入。村井公道前理事長が、海水を木の根元に散布することで糖度を高める栽培方法を確立した。その後も技術を応用して作物を増やし、消費者の高い評価を受けて地元直売所や都市圏のスーパーにも流通させている。

ブランド確立を機に活躍の場は施設外にも。高齢などの理由で耕作を続けることが難しくなった地元農家から委託を受けて作業する「地域元気営農事業」を8年前から続けてい

る。

サツマイモ畑では、苗の定植や日常の細かい管理を農家が行う一方、育苗や海水散布、収穫作業など負担の大きい作業は施設が請け負う。農地を提供する農家の平均年齢は76歳。竹下武幸理事長は「高齢でも無理なく農作業を続けられる。地域の人に喜んでもらえている」と手応えを語る。

収穫物は全量買い取って売り切るのも特長。ミカンは一つつつ丁寧に磨き、サツマイモは施設内の貯蔵庫で「焼き芋にすれば糖度50度を超える」状態に仕上げる。利用者の「できること」を結集し、さらに付加価値を高めていく考えだ。

■もやいの会（多久市） 個性に応じ作業分担

社会福祉法人もやいの会（多久市、川副春海理事長）が運営する「障害者支援センターまや」は、オランダ方式の複合環境制御システムを導入したハウスで、中玉のミディトマトを周年栽培している。葉や花を人の手で間引くなど、細かい作業で高品質・高収量を実現。法定最低賃金以上の工賃が支払われる就労継続支援A型として10人が作業に励んでいる。

廃校となった市立小学校の跡地に農水省の補助事業を活用して12アールのハウスを建設、2015年4月から栽培を開始した。一般にトマト栽培は難しいとされるが、同施設では作業を約30工程に細分化し、個性や障害の特性に応じて作業を割り振っている。

ハウス内は畝の間を広く取ってレーンを敷き、台車に座ったまま収穫などの作業ができるバリアフリー仕様。ハウスに頻繁に出入りし、1株1株に目が行き届くため、品質向上や病虫害の発見にもつながる。

農業分野担当の副島正純副施設長は「1人で全ての作業を同時並行でするのは難しいが、チームを組んでやるうちにできることも自然と増えた」と実感する。

割れ玉や規格外品を使い、シフォンケーキなどへの加工や直売所の運営にも手を広げ、就労継続支援B型の利用者も合わせて定員を拡大。九州農政局の「ディスカバー農山漁村（むら）の宝」に選定された。川副理事長は「収量を増やして収益を上げ、利益を障害者雇用や工賃の増加という形で還元していきたい」と話す。

■セミナー講演要旨 農林水産政策研究所・主任研究官 小柴有理江さん

地域の人的資源活用を

18～64歳の障害者で在宅者は324万人。うち事業所や福祉作業所で働く人は69万人で割合としてはまだ少ない。障害者が従事している作業は単価が低く、集中力や器用さが必要とされるなど、個人の適性に左右される事情もあるようだ。

社会福祉法人などが農業分野に進出する割合は、2012年度調査で33.5%にまで増えている。農業を行っている理由としては「健康・精神に望ましい」が最も多く、「農産物の販売」「加工品の原料調達」が続く。参入時期が直近であるほど「経済事情で作業が減少した」と回答する率が高い。障害者の法定雇用率を守ることが難しい企業が、特例子会社制度を利用して農業に参入するケースも出てきている。

逆に農業をしない理由は「土地がない」が半数以上で、「知識・技術がない」「専門スタッフの確保が困難」と続く。これらの問題さえ解決すれば、参入の動きが拡大する可能性があるといえそうだ。

「アゲイン」（兵庫県）は、ニートや引きこもりを支援するNPO法人として設立し、代表が所有する農地で共同作業をしていた。設立3年後には本格的に農業をしようと、地元農業大学の新卒生採用を始めて農業専門職員として配置。水稻、露地・施設野菜、パン製造に障害者ら65人が就労しており、規模拡大にも取り組んだ。150種類以上の品目を生産し、市場の高い評価を受けて5千万円を超える売り上げを達成できるところまでできている。

「九神ファームめむろ」（北海道）は、A型作業所がなかった地元・芽室町から誘致を受け、愛媛県の総菜製造会社の出資で2012年に設立。ジャガイモやカボチャを生産し、親会社に総菜の原料として販売しており、不足分を地元のJAが供給する支援体制もでき

ている。利用者の平均工賃は月額10万円を実現し、他県にも広がっている。

地方公共団体が支援する形も考えられる。香川県では、県社会就労支援センター協議会と共同で受注窓口を設置。地元JAや生産部会を通じて作業を手伝ってほしい農家や法人の依頼を受け、作業受託を希望する福祉事業所などを紹介している。ニンニクやタマネギなど重量野菜の生産は重労働だが、適期収穫による品質向上や高齢農家のつなぎ止めの一役買っている。作業をきっかけに障害者雇用を始めた農園もある。

農業の側からすると障害者が農業就労することで農地の保全・活用や担い手不足の解消、地域活性化などの効果が期待できる。農家が障害者の可能性に理解を深められるようにしたり、福祉施設職員が農業技術を学ぶ環境を整えるなど求められる支援は多い。

農家と福祉施設の交流のほか、両者をマッチングする存在も必要。自治体やJAなど、地域の人的資源を最大限活用し、障害者の居場所や就労の機会をつくっていくことが大事だ。

■記者の目 笑顔引き出す視点を

「農福連携」は古くから行われてきた福祉事業所の運営手法の一つだが、言葉としては比較的新しい。農村地域での人口流出や荒廃農地の増加に歯止めがかからない現状をどうにかしたいという思惑が透ける。ただ、障害者に過度の期待を背負わせたり、負担を強いてはならない。

農業を障害者本人や共に支える地域にとって魅力的なものにする努力も欠かせない。トマトの選果を取材していると、傷がないかまじまじと見つめ、1個ずつ大事そうに磨いていた男性が「一つどうぞ」と差し出してくれた。どこか誇らしげなその笑顔を引き出す視点が大事だ。

確かに課題も多い。すでに取り組んでいる宮崎県のハウスショウガ農家は「楽しいと思ってもらうまで根気よくマンツーマンでしなくてはいけない」と指導の難しさを語る。だが、農作業は多岐にわたる仕事があるため、一人一役を果たす活躍の場が必ずある。

セミナーには県内の福祉施設関係者が数多く出席しており、関心の高さがうかがえた。だが、現場の生産者やJA、自治体などの参加は少ない。両者のミスマッチを埋めるところから始めたい。

共働きで障害ある息子の子育て、無理だった 野田聖子氏 聞き手・山下剛

朝日新聞 2017年1月29日

我が子に障害があったとき、政治家は何ができるのか。日常的に医療的ケアが必要な「医療的ケア児」を育てる野田聖子・元自民党総務会長（56）に聞いた。

——卵子提供を受け、2011年に50歳で長男を出産されました。その後、どのように育てていますか。



息子は多くの病気を持って生まれたので、生まれたときからずっとNICU（新生児集中治療室）に入っていて、2歳3カ月で初めて退院しました。入院中は看護師さんが24時間みてくれていたけれど、退院後は夫婦で面倒をみることになる。その大変さは想定していなかったわけです。

自民党の野田聖子元総務会長＝2016年10月撮影

退院の前年12月に第2次安倍内閣が発足して、私は自民党総務会長になっていました。看護師さんに「こんなときに母親はどうするの？」って聞いたら、「仕事を辞めてずっとおうちです」って。「あ、でも野田さんのところは無理ですね」とも。

共働きをすすめる政策が展開されるなか、母親が仕事を辞めることを前提とした仕組みになっている。うちの場合は夫が仕事をあきらめました。共働きの夫婦で障害を持った子を育てられるかどうかを確認できる社会実験だと思ってやってみた

けれど、結論から言うと、できない。

——私自身、医療的ケア児の息子を育てていますが、日常的に医療的ケアをするのは肉体的にも精神的にも疲れます。

本当に大変で、夫婦の危機でしたね。当時は息子はまだ不安定で、退院後に一度、心肺停止になった経験もあって、ビクビクしながら育てていました。私は総務会長として普通の国会議員よりも忙しく働いて帰ってくるけれど、夫は一日中面倒をみているからくたくた。何度ももめて、こんなにもめるために子どもを産んだわけじゃないのに、と思いました。

医療的ケア児の支援、国会でも法整備に向けた動き 山下剛



医療的ケア児も保護者の付き添いなし 障害者総合支援法改正に取り組んだ
で学校に通えるよう訴える保護者ら

2014年9月	医療的ケア児も預かる障害児専門の保育園(東京都杉並区)が開園
15年3月	超党派の勉強会「永田町子ども未来会議」が発足、第1回会合
16年5月	「医療的ケア児」という言葉を盛り込んだ改正障害者総合支援法が成立
17年度	厚生労働省のモデル事業がスタート(予定)

朝日新聞 2017年1月29日
日常的に経管栄養やたんの吸引など医療的ケアが必要な子どもたち。いわゆる「医療的ケア児」を支援するため、政府の取り組みが始まった。医療的ケア児の母親である国会議員らも法改正に向けて動いた。

■ケア児母親の野田聖子氏ら超党派で法整備
目指す 「看護師さえいれば保育園で社会生活を送ることができる。そのエビデンス(根拠)を作るため『捨て石』になるつもりでやっている」

自民党の野田聖子・元総務会長は朝日新聞のインタビューにこう語る。

不妊治療の後、卵子提供を受けて2011年1月に50歳で出産。生まれた長男は心臓などに複数の病気があり、病院のNICU(新生児集中治療室)に入った。退院したのは2歳3カ月のとき。気

管切開し、胃ろうがある医療的ケア児を預かる保育園や幼稚園は見つからなかった。

野田氏は当時、総務会長を務めていた。「共働きの夫婦で障害を持った子を育てられるかを確認するつもりでやってみたが、結論から言うと、できない。夫が仕事をあきらめました」

医療的ケア児も預かる障害児向けの保育園「ヘレン」が東京都杉並区に開設されたのは14年9月。ようやく保育園に通えるようになった。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行